

# 秋霜烈日の正義

一切衆生悉有仏性

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

武装検事、それは国内最強の公務員集団の一翼を担う存在である。

そんな武装検事の一人である神谷修也は、ある出来事がきっかけでとある組織を捜査していた。

その折、彼の元に組織に関する情報が舞い込んできた。

これをきっかけに、彼の停滞していた歯車が動き出す。

見切り発車のうえ、処女作かつ原作未読勢なので、内容はあまり期待しないでください。また、不定期更新になりますので、その点ご了承ください。

# 目次

序章 武装検事の使命

第壹話	勃発	1
第貳話	捜査再開	10
第参話	手掛かり	22
第肆話	臨場 part 1	35
第伍話	臨場 part 2	49
第0・5話	発端	73

## 序章 武装検事の使命

### 第壹話 勃発

『武装検事』、それは日本国内における凶悪犯罪の捜査を所管とする、国家公務員のことを指す言葉だ。

近年、凶悪犯罪が横行する中、その対抗的存在として誕生した国家資格、武装探偵（通称：武偵）が世間に認知されている現代において、そのほかにも、同様の目的で誕生している職業として、武装弁護士、そして武装検事が存在する。

特に、武装検事の最たる特徴は、職務上の殺人が容認される「マードーライセンス」、所謂殺しの免許を持つ公務員であることだ。この資格を持つ人間は、武装検事を除き、警視庁公安部公安0課と呼ばれる組織の人間しかおらず、両者ともに“国内最強の公務員集団”と呼ばれている。

その実力は、先述した武偵の中でもごく限られたものしかない、トップクラスの實力を誇るSランク武偵を大きく上回るほどだ。

そのため、武装検事になるのは極めて過酷であり、その内容は当然ながら並大抵の人

間には不可能であると断言する。まず初めに、司法試験に合格し、最終的に法曹としての資格を得ることが最低条件であり、次に、武装検事としての適性を判断する武装検事採用試験※1に合格し、半年間の研修を修了しなければならぬのだ。

以上の篩ふるいにかけられ、最終的に武装検事を志す者に求められるのは、つまるところ人間がもつ能力の限界に等しい。まさに、努力だけでは決して到達しえない領域、そこに至れるのは、それにふさわしい才覚を持つ者だけなのだ。

よつて、武装検事になれるものはごく少数である。しかし、武装検事になれたとしても、その先にはさらなる困難が立ち塞がっている。

ここ数年、社会問題として取り上げられることも多くなつたブラック企業を超越する激務の日々、現場では死線を潜り抜けることも珍しくなく、その対価としてはあまりにも割に合わない給料。このような待遇にも関わらず、彼らは、これを是としながらも、我が国の国益のため、日夜任務に従事しているのだ。

(日暮彩人著「秋霜烈日の正義」冒頭より)

これは、そんな武装検事である一人の男が、己が正義のために戦う、物語だ。



バーン!!!

深夜の東京、人々の喧騒が幾分か落ち着いたオフィス街で、突然それは起きた。都心のと真ん中に位置する高層ビルで起きた爆発は、瞬く間に伝播し、夜の街にざわめきを生み出した。

「…(こ)う来たか。」

ビルの付近に停まっている車の中で、男がつぶやいた。年齢は20代後半、スーツを身に纏い、そのラペルホールには検察官記章が爆発のもと爛々と照らされている。

また、その腰にH&K USPドイツの銃器メーカー、H&K(ヘッケラー&コッホ)社が開発した自動拳銃。を携えているこの男、決してカタギとはいえない証を持つその名は、神谷修也。法務省武装検事局(通称:武検局)所属の武装検事だ。

「(さて、どうしてくるか。)」

お察しの通り、武装検事である彼がこの場所にいる理由は、この爆発が起きるという情報を事前に入手し、張り込んでいたに他ならない。

「…武装検事の神谷修也だ、IDは●●▲■●●…●●◆●■ビルで爆発が起きた。至急応援を要請する。」

その甲斐もあり、こうして爆発現場にいち早くついたわけだが、修也は車の中から電話で警察に応援要請をしてから、ずっとビルの様子を観察している。どうやら、この爆発を起こした仕立て人の動向を追っているようだ。

「ん？この音は…。」

そんななか、修也は爆発のあったビルの地下駐車場入り口から何かの音を聞いたその時、その入り口から猛スピードで車が飛び出してきた。この爆発の犯人と思わしき人物が運転する車両は、そのままのスピードで急速にビルから離れていく。修也はそれを確認するとエンジンを始動させ、急速発進して当該車両の追跡を開始した。

彼の過ぎ去った現場には、ビルから出火した炎と黒煙が上る様子がただ残り、後方からサイレンの音が聞こえてきていた。



犯人とおぼわしき者が運転する車両を追いかけた先には、港湾地区が広がっていた。

東京湾に面した場所に位置するここでは、倉庫が犇めき合っており、逃走先としては



悪くない。また、海に面していることもあり、海上ルート経由で逃走するならばベターな選択だ。

しかしそれは…

「…」か。」

ここに武装検事がいることを勘案しなければの話だが。

追跡した車両が倉庫前で停まる様子を後方から視認した修也は、車を停めて外に出た。そして、ホルスターから拳銃を取り出し、スライドを少し引いて薬室に弾丸を装填したか確認する。確認し終えたと銃を戻し、倉庫へと静かに接近し始めた。

ここで少しおさらいするが、そもそも、国内における凶悪犯罪の捜査活動を主とする武装検事の彼が、何故今回の爆発現場に居たのか…、それは現在彼が追っているある組織に関係している。その組織の名は「イ・ウー」。いかなる軍事国家も手出し出来ない集団と言われるその組織が日本において活動していることを知った修也は、今日まで捜査を続けていた。そして、とうとうイ・ウーに関する情報入手して今に至ったのだ。

目標が入った倉庫に近づきながら、修也は考えていた。ここ一体は、確かに海も側もあり、逃走経路としては妥当といえる。しかし、なぜ此処に来たのか修也は考察していた。今回の出来事に関する情報源は、信頼度の高いものなので、イ・ウー関連の人間である事はほぼ間違いない。その上で、噂通りの組織であるなら何かしら仕掛けている可

能性も十分考えられ、これ自体が罠の可能性も考慮する必要がある。

警戒心を保ちつつ、修也は目標に接近していった。

「『超感覚』※3……人の気配を感じない……そしてこの“匂い”は……まあいい、入ろう。」

倉庫の前まで近づいた修也は、彼の持つ能力『超感覚』を使用した。

能力を使用した修也は、倉庫内部の状況を確認し、銃を構え遂に倉庫内に入った。倉庫内は暗く、目視で内部を確認することは不可能な状態だったが、修也は能力を使うことで対応していた。その時、突然倉庫の奥から気配を感じ、修也は咄嗟に銃口を向けた。

「ッ」

銃口を向けた先からは、明らかに人の気配を放つ存在が現れた。こんな時間に一般人がいることはほぼない。しかも、超感覚を使用していたのにもかかわらず気配を感知できていなかった中、突如現れた気配。彼の能力を持つてしても探知できない存在ならば、こいつがビル爆破の犯人に違いない。修也は、銃口を向けつつ、その者に向かって、声をかける。

「武装検事だ。お前がビル爆破の犯人だな。両手を上げて頭の後ろで組み、うつ伏せになれ。」

そう修也が言う中、月明かりが倉庫内に差し込み相手の姿が見えるようになった。その者は身長170cmほどで、全身黒い外套に身を包み、顔はフードを被っておりわか

らない。武器を隠し持っている可能性もあり、警戒度を最大限にしていると、その者は、修也に従って手を上げようと動かし始めた。そして、手を上げながらフードを取り、自身の顔を曝け出した。その顔は、日本人の男の顔立ちで若く、10代半ばの顔つきだ。思っていた様相と異なり、若干驚きを感じた修也であったが、

「お前は何者だ。なぜビルを爆破した。」

質問を投げかけると、男はそれに、

「俺の目的のためだ。」

と答えた。

「目的とは何だ。一体何を企んでいる。」

さらに問いを投げかける修也であったが、男はそれに答えず、

「それは自分で調べることだ武装検事、いや元Sランク武偵〔オールラウンダー〕神谷修也。」

「!ッ」

「さらばだ。また会う時まで、死ぬんじゃないぞ。」

そう言うのと、男は指をパチンと鳴らして姿を眩まし、同時にタイマーの音が一齐に鳴り出したのを聞き取った修也は、咄嗟に倉庫の外へ走り出した。

「ドカーーン!!!」

倉庫を出た直後、突然の爆発により、倉庫は高層ビル同様燃え盛った。その際、火傷と飛んできた破片による傷を負ったが、至って軽傷で、こちらに近づいてくるサイレンの音を聞きながら、修也は銃をホルスターに戻し、スーツの汚れを払っていた。

「全く。やはり爆弾だったか。」

スーツをある程度払いながら、修也はそう述べた。なぜ、爆弾だとわかっていたのかは、彼が倉庫に近づいたときに使った超感覚により強化した嗅覚で爆薬の匂いを嗅ぎ分けたからである。そのおかげで、爆弾に警戒しながら咄嗟の行動にも対応できるような注意を注ぐことで、爆発による負傷を最小限に抑えたのだ。スーツを払うと、彼は電話を取り出し、ある人物へメールを転送した。

「『ピッピピッピ』情報が漏れていた、警戒しろ。by 修也『ピッピ』」

『奴の言う通りなら、奴は俺のことを知っていないながら、敢えて犯行に及び此処に誘き寄せたことになる。そして、奴の目的とやたらに俺も関わっているのか？。ともかく、ようやく接触できたんだ。捜査を続けなさいといけないな。すべては、俺の正義を為すために。なあエリー。』

潮風に吹かれながら、修也は考えに耽る。今は亡き彼女との約束、そして、彼自身の正義に想いを馳せながら。



これは、1人の武装検事が織りなす物語、その序章に過ぎない。彼、そして彼の周りでこれから起こる数々の事件の先に待つ真実は一体何なのか。その真相にたどり着くまで、彼は歩み続ける。その道が途切れるまで。だからよ、止まるんじやねえぞ……。

次回、第弐話捜査再開

## 第貳話 捜査再開

倉庫での爆発の後、駆けつけてきた警察官たちと現場処理を終えた修也は、いったん自宅マンションに戻り、幾ばくか仮眠をとった。しかし、少しして彼が起きるとすでに朝日が昇っていた。わずかな休息を味わった修也は、部屋の壁にかけていた時を一瞥し、

「もう朝か・・・。」

とつぶやき、起床した。

あまりに短い睡眠時間ではあるが、武装検事である彼にとってこんなのは日常茶飯事である。武装検事はその職内容から、激務であることはお察しいただけると思うが、それゆえ睡眠時間すらろくにとれないことはざらにある。同じ公務員でいえば、官僚や警察官などの公安職も同様に言えるかもしれないが、武装検事はその仕事のリスクが一味

違う。もし給料とリスクがかみ合っていない公務員ランキングがあつたら、確実にトップに入るだろう。

武装検事、社畜極まれりである。

シャーーツ！

シャワーを浴びながら、修也はほんのさつき起きたことを考えていた。

『お前は何者だ。なぜビルを爆破した。』

『俺の目的のためだ。』

『それはおまえが調べることだ武装検事、いや元Sランク武偵『オールラウンダー』神谷修也。』

『さらばだ。また会う時まで、死ぬんじゃないぞ。』

『ドカーン!!!』

「……いったい奴は何者なんだ……。」

キュツ!

シャワーを浴び終えて部屋に戻ると、テーブルの上で携帯がパイプ音を鳴らしていた。タオルで頭をふきながら、修也は電話をとった。

『ブーブーブーピツ!』神谷です。はい、今は自宅にいます。はい、わかりましたすぐ登庁します。『ピツ!』さて、支度するか。」

そう言うと、神谷は早速出かける支度を始めた。まず、帰ってきたときに着ていたスーツは汚れてしまったので、予備のスーツ一式をクローゼットから出した。そして、このスーツはただのスーツではない。これは武偵校の生徒が着る制服のように防弾性を兼ね備えており、このような武装検事用の装備文中でも言及されていたように、スー



ツをはじめとした、武装検事のために作られた装備が武装検事に支給される。スーツの他にも、新米の武装検事には火器類一式が支給されるなど、様々な装備を支給している。しかし、仕事柄任務中にこれらの装備が損傷することは少なくなく、ある程度経費で落とせるが、別途自己負担することが多い（ただでさえ薄給公務員なのにさらに負担しなくてはいけないのには涙目にならざるを得ない）。また、中には自分で装備を調達する武装検事もおり、ある程度キャリアがあるほど、その傾向が強い。まさに仕事人のこだわりである。がいくつか支給されている。次に、腰のベルトにヒップホルスター付きの拳銃を装着し、一度抜いて弾倉などを確認する。確認し終わるとホルスターに戻し、あとは、手錠を腰の後ろに着けて、ナイフを袖の内側に忍ばせ、最後に検察官記章を身に着け準備が整った。

「よし・・・行くか。」

修也は部屋から出ていった。そして、人のいない閑散とした部屋に静寂が生まれ、その無機質な内装が色濃く顕在化した。ただ一点、机に置かれている“少年少女3人が写っている写真立て”を除いて。



修也が車で向かった先にあるのは、霞が関、知つての通り、日本の中央省庁が犇めく行政の中心地だ。その中で、法務省本省とはじめとして、公安調査庁、そして檢察庁が入っている中央合同庁舎6号館A棟、ここに彼の所属する組織、武装検事局本部がある。この庁舎の地下駐車場に車を停めると、彼の元に若い女性が近づいてきた。

「先輩！おはようございます。先輩も朝から呼び出されたんですか？」

「ああ、お前も上に呼び出されたのか？」

「ええ、激務なのは覚悟していましたが、研修中でも早朝から出勤することがこれほど多いとは思いませんでした。しかも残業時間が長すぎて過労死しちゃいますよ……」。

「まあ今のうちに慣れておくのも悪いことじゃないさ。武装検事になればこんなことは当たり前だ。」

「そうですね・・・精進します！」

彼女の名前は臼井律子<sup>うすいりつこ</sup>。今年採用試験に合格し、現在研修中の局内で最若手のプロビー新入りや見習いに対して使う言葉である（本作では研修中の新米武装検事のことを指す）。海外ドラマでは、刑事ものでこの言葉が使われることがある。本作における武装検事の設定には、FBIをはじめとしたアメリカの連邦機関の仕組みにインスパイアされた面があり、これはその一端として表れているのだ。まあ、要するに作者の趣味である。だ。小柄で人柄もよく、明るい性格であり、修也の所感としては武装検事として優秀な人材であるとの印象を持っている。中でも、プロファイリングの腕は、探偵科<sup>インケスタ</sup>のSランク武偵に引けを取らない実力を持っている。まだ採用試験に合格して2ヶ月しか経っていないが、誰もが通る地獄巡り難関である採用試験を突破した武装検事の卵は、半年間の研修を受ける必要がある。まずは事務手続などを覚えるためにデスクワークをこなし（基本2ヶ月）、ある程度経過して、問題ないと認められると次は実地研修に赴き、教育係たる武装検事がこれを監督、評価し最終的な可否を判断し、合格すれば正式に武装検事としての身分が与えられる。これを経験した者が一貫しているのが「地獄だった。」という言葉である。以降、地獄巡りといわれるようになったこの研修では、武

装検事としての職務を全うできるか、最後の関門として立ちふさがる（要するにめつちや働く）。まさに最難関。これを突破したものは、一人前の社ち：おっほん！武装検事になることだろう。

を順調に体感しているようだ。

白井と話しながら庁舎内部に入り、武装検事局のオフィスの前まで歩いていた修也だったが、ロックがかかっているドアの前で止まり、

ピーーピーロン♪：ガチャ コツコツ・コツコツ・『今日未明、都内の高層ビルで爆発が起きました。警察は事件と事故両方の可能性を視野に捜査を行っています。また、同時期に港湾地区で起きた爆発において、警察は高層ビルでの爆発との関連性があるかどうかについても捜査を行うとのこと。今回の事件では、死傷者はでておらず……。』

網膜認証を行いロックを解除した。オフィスに入ると、テレビがつけられており修也がかかわった件についてのニュースが流れていた。時間的に人はほとんどおらず、修也と白井の他には同僚の武装検事が何名かと、直属の上司にあたる角宮部長かどみやがいた。彼

が、今朝修也を呼び出した張本人だ。彼は、修也たちが入ってきたのに気が付くところに近づいてきた。

「神谷、お前今日の未明に起きた爆破事件の犯人を取り逃がしたそうだが、犯人の目星はついているのか？イ・ウーについての情報は得られたのか？」

「いえ犯人の目星はついてはいませんが、どうやら私を知っていたようで、今回の件は罠だったと思われます。犯人がイ・ウーの関係者であるかは確証を得られませんでしたが、私に接触を仕掛けてきたということは、ほぼ間違いないと思われます。犯人の顔は覚えていきますので、ひとまずその線から洗ってみようと思います。」

「そうか・・・取り逃がしたのは残念だったが、今の我々は奴らに関する情報をほとんど知りえていない。極力殺さず生け捕りにしろ。」

「了解です。」

一通りの報告を終えると、角宮はさらに話を続けた。

「それから神谷、ちょうどいいお前に頼みたいことがある。」

「?何でしょうか。」

「実は白井についてなのだが、お前に実地研修研修期間をある程度過ぎたプロビ―は、実際に犯罪捜査を行い、武装検事としての職務を全うできるか、最終的な判断が下される。本作では、白井が実地研修に挑むこととなり、修也がその教育係を務めることになったが、文中でも言及されていたように、武装検事は多忙であるほか、基本単独で行動する武装検事にとってプロビ―の存在が邪魔に思われていることもあり、教育係を務められるものがなかなか現れない。そんな事情から、あまりにひどいと研修期間（地獄）が延長されることもある。の教育係を務めてもらいたい。」

「私がですか?なぜです。」

「ああ、彼は研修を始めてすでに2カ月は経っているし、そろそろ頃合いだと思うんだが、教育係をする暇がある武装検事がないんだ。そんな中、現状のお前の任務は、リ

スク面からいっても教育係としてプロビ―を同伴させるにはうつつけだ。」

確かに、白井はもう実地研修に挑むには十分な仕事をこなしている。そろそろ、教育係を選択する時期ではあるが、修也にとってはこの捜査は“ただの捜査ではないのだ”。そんな心中の修也にとっては、いくら白井であつてもそう簡単に連れていくわけにはいけない。それも“彼女以外と”バディを組むのは、少し抵抗を感じてしまう。修也は反論しようと口を開くものの……。

「ですが……」ついに現場に行けるんですか!?先輩とご一緒できるなんて光栄です!」……白井。」

「まあそんな訳だ。こいつのプロファイリング能力は、きつとお前の役に立つだろう。」

「……了解しました。白井の教育係拝命します。」

結局押されてしまった……。

「ありがとうございます部長！まさか先輩と捜査ができるなんて・・・ふふ。先輩！よろしくお願います！」

「ああ、よろしく白井。」

正直不本意ではあったが、修也は隣にいる後輩の純粹な笑顔を見て、仕方ないなどばかりに苦笑交じりに答え、握手をした。

「よし、ではこれより2人にはイ・ウーに関する情報収集にあたってもらおう。心してかかれ！」

『了解！』

そして、2人の掛け声とともに新たなバデイが誕生した。





斯くして、2人の武装検事による捜査が開始された。この先彼らに待ち受けるものは  
一体……。

次回、第参話手掛かり

## 第参話 手掛かり

現在、修也と律子は庁舎地下にある科学分析室中央合同庁舎6号館A棟地下にあるラボ。武装検事局所属で、他の捜査機関と同様に科学的な分析を必要とすることから、武装検事局設立と同時に設置された。技官（分析官）が数名おり、日夜仕事に勤しんでいる。にイ・ウーの手掛かりを探しに向かっていた。二人で歩いていると律子は修也に話しかけた。

「先輩、これから私達が調べるイ・ウーとはどんな組織なんですか？話を聞く限りだとその全容はほとんどわかっていないようですが……。」

「ああ。少なからずわかっていることは、その組織が実力者揃いの戦闘集団ということだけだ。世界中のどんな軍事国家も手出しできないだしく、最近では日本でも活動しているという情報が入ったくらいで、その目的もメンバーの素性すらわかっていない。」

「イ・ウーは日本で一体何をしようとしているのでしょうか？」

「さあな。少なくとも、この国に害を為す存在なら叩き潰すしかない。」

「そうですね……でも私たちならきつとできますよ！」

「・・・そうだな。」

そう話しながら歩いていくと、科学分析室前に到着した。

「ここに来るのは初めてか？」

「はい、存在自体は知っていましたが、こんなところにあるとは知りませんでした。」

「扱う物が物だからな。用がない限り近づくこともないし、ここには武検局武装検事局の略称。でも武装検事ぐらいいしか訪れない場所だ。君も将来来るだろうから覚えておくように。」

「わかりました！・・・それより先輩、私たちもう長い付き合いですし律子と呼んでください。他人行儀みたいで少し寂しいです・・・。」

「・・・わかった考えておくよ。」

こうして、二人は仲睦まじく・・・

「はい！（ちよつと強引すぎたかな？まあでもここ<sup>武裝検事局</sup>まで追いかけてきたんだから今更

だよね！せっかく一緒に仕事をするんだから、このチャンス活かしていかないと・・・でも仕事もしつかりやらないといけないし・・・どう両立していこうか？）

仲睦まじく？科学分析室へと入っていった。



科学分析室へと入っていった修也と律子であったが、律子は初めて入ったためか少し期待に胸を膨らませながら思索していた。

「(初めてここに来るけどどんな感じなのかな? やつぱりドラマみたいにくールに仕事をこなして・・・) 『おい! 事件番号D306SWで使われた銃の線条痕の特定終わったか!』・・・(うん?)」

「まだです! ほかの作業に精一杯で終われません! あと追加の分析依頼も来ています!」

「くそが! どんだけ仕事しても一向に増え続きやがって! そんなに俺たちをあの世に逝かせたいのか! (うーん!?)」

「グダグダ言わずに仕事しろ! いつまでたっても終わらないぞ! (うーん!!?)」

しかし、律子の予想をことごとく裏切り、そこには予想していたものと正反対のもの、有り体にいえば修羅場が眼前に広がっていた。あまりに思っていたのと違かったためか、律子は動揺を禁じ得なかった。

「せっ先輩。これは一体? 何やら皆さん鬼気迫る勢いなのですが・・・」  
隣にいる修也にこの惨状について聞くと・・・

「ああ、そういえば話してなかったな。ここでは分析官武装検事局に所属する技官の

呼称。文中にもある通り、彼らは武装検事局が扱う事件すべてを引き受けることから、常に多忙を極めている。また、たまに分析依頼が一挙に押し寄せることがあり、その時の分析官たちは武装検事ですら引くほどの形相になり（原因はこいつら武装検事）、関係者は余計近寄りたたくなる。なお、桂木さんは例外の模様。全員が法務省採用の技官ではなく他の省庁から出向している技官もいる。そのため、人員の入れ替えがそれなりにあり、最初は大抵その仕事量に押しつぶされるが、数年で出向から戻ってくると、出向前より段違いに遅しくなっているのだとか・・・が武装検局の扱う全ての事件の分析を引き受けているんだが、たまに膨大な量の依頼が一気にきてこうしてパンクしかけることがあるんだ。普段はこれほど殺気立ってはいないんだが、知つての通りうちほどこも多忙で科学分析室な。ここも例外ではないということだ。予算の問題的にもまあ仕方ないとかいえないな。」

何度か経験があるのか、修也は平然としながら律子にこの状況について説明した。武装検局のブラック性の一端を改めて実感した律子は・・・

「なつなるほど。武装検事も大概ですが、本当にここは大変ですね。」

「そう思えるのは最初だけだ。いずれ骨の髄まで身に染みて慣れるさ。」

少々この職場を引き気味に感じ、修也も在りし日の自分を思い出したのか、どこことなく死んだ目で見えていた。

そんなこんなで、この光景を眺めていた二人のもとに、一人の女性が近づいてきた。

「あら、修也君じゃない。こんな朝からどうかしたの？」

「(うわーすごい美人)。」

律子は突然現れたこの女性に少し見惚れていたが、修也は見知っていたのか平然としていた。

「おはようございます桂木さん。実は、お忙しいのを承知の上でお願いしたいことがあるんですが……。」

「勿論、修也君の頼みなら喜んでしてあげるけど、見ての通り忙しくてね。ものよつては時間が

がかかるわよ?。」

「構いません。ありがとうございます。」

彼女の名前は桂木美佐江<sup>かつらぎみさえ</sup>。科学分析室の主任分析官で、修也もよくお世話になっている人物だ。

「どういたしました。ところで修也君?隣にいるこちらのお嬢さんは?。」

美佐江は律子に会うのは初対面だったので、隣にいる律子について修也に聞いた。

「ああそういえば。紹介します。本日付で、私のもとで実地研修を受けることになった白井武装検事です。」

「初めまして。紹介にあずかりました臼井律子です。せんぱつ神谷武装検事のもとで本日から実地研修を行うことになりました。よろしくお願いたします。」

「可愛らしい新人さんねえ。私は桂木美佐江。ここで主任分析官をしているわ。よろしくね。何かここに用があつたら私に遠慮なく言つてちょうだいね。」

「ありがとうございます。」

「でも驚いたわ、まさかあなたが教育係をするなんて。あなたの性格なら引き受けな  
いと思つていただけけど、もしかしてこの子のことが好きなの？」

紹介が終わると、美佐江はいきなり爆弾発言をかましてきた。突然のことに、律子は「!?（え? いやそんなわけ・・・先輩鈍感だし、今回の実地研修も乗り気じゃなかった。でも、桂木さんの話通りだったら多少なりとも私に好意があるのかな? もしそうだったら・・・もしかして相思相愛!?（※違います）だったら、そこからどんどん私への好意を高めていつて、あわよくば・・・）」

ひどく動転していた。

仮にも探偵科のSランク武偵に匹敵する能力を有する彼女は、修也のことになるとその能力も形無しになってしまうようだ。その優秀な頭脳を、お花畑ワールド全開で高速回転させ深い（浅い）考察をしていた律子であつたが、

「いえ、そんなことは。臼井の実地研修の教育係に適任なのがちょうど私しかいなかったもので、角宮部長に頼まれてまして。」

「あら、そうだったの。」

「(ガーン!!)」

現実是非情であつた。律子は打ちひしがれてしまい、悲壮感漂わせる結果となつた。そんな律子の心中を察することなく、修也は話を進めた。

「では、立ち話もこれくらいにして、早速お願いしてもらつてもいいですか?」

「ほんとせっかちなね。まあいいわ仕事をしましょう。何をしてほしいの?」

「はい、きょう未明に起きた爆破事件で、港湾地区の倉庫で遭遇した人物の顔の3Dモデルを作成して、各機関のデータベースと照会してほしいんです。」

「なるほどね・・・わかつたわ。じゃあ付いてきて頂戴。」

一行は分析ルームへ足を進めた。



分析ルームに向かった修也たちは、修也が見た人物の特徴をもとに顔の3Dモデルを作成していた。あのとき、月明かりが差し込んではずきり見えた人相を修也はずきり



と記憶しており、現状これが唯一の手掛かりだった。

「……(あのとき、奴はわざわざ自分でフードを上げて顔を曝け出した。自分の人相を知られても問題ないという愉快犯なのか。それとも絶対にとどり着けないと確信していたからだだったか……。おそらく後者だろうが、あえて見せてきたんだ。何かしらのヒントを残していると考えるのが妥当だろう。これが糸口になればいいが……。)」

カチャカチャカチャカチャ！カチャツ！

「よし。できたわよ修也君。修也君？」

「……あつはい。すいません考えごとをしていました。」

作成しながら犯人像を思案していた修也であったが、美佐江の呼びかけにいったん我を戻した。

「そう……。まあともかくこれでできたと思うけど、どうかしら。」

画面に映し出された3Dモデルを見た修也たち。そこにはあの時修也が遭遇した人物と瓜二つの顔が表示されていた。

「思っていたのと随分と違う印象ですね。これが例の爆破犯なんですか？」

「ええ確かにこの顔です。桂木さん、これをデータベースで照合してくれませんか？声の特徴から日本語を流暢に話しており、年齢も10代半ばのような声でしたのでまずは、日本の各教育機関のデータベースから照会してみてください。これが奴の本当の顔

なのかわかりませんが、実在する顔ならば手掛かりになります。」

「わかったわ。ただこの顔だけだと結果が出るとはばらく時間がかかるわ。早ければ今日明日中にわかるから、結果が出たら連絡するわ。」

「ありがとうございます桂木さん。」

「ありがとうございます。」

「ふふ、いいのよ。さあ行つて二人とも仕事はまだあるんだから。」

「はい、これでお暇します。」

目的も達成し、美佐江に促されるまま退散しようとしていた修也たちだったが、部屋を出る前に彼女に声を掛けられ

「あつ修也君。ちよつと話しておきたいことがあるんだけどいい?」

ドアのところで呼び止められた。少しいつもより真剣そうな顔をしていた美佐江を見て、修也は

「白井……先に外に出ていてくれないか?少し話があるようだから。」

「先輩……はい、わかりました。外で待っています。」

先に律子だけ外に出し、カチャンとドアが閉まると美佐江が口を開いた。

「ねえ修也君。あなた最近生き急いでいない?さつきもかなり真剣そうに考えていたようだけど、この事件に何か執着していることでもあるの?」

「……。」

修也は黙っていたが、美佐江は話を続けた。

「この仕事は本当に忙しいわ。公務員だから薄給だけどその割に仕事は多いし。でも、あなたたち武装検事は常に危険と隣り合わせ、特にあなたたちのような若手はどんなに優秀な人材でも殉職することが少なくない。そんな子たちを見てきたからわかるけど、修也君、あなたこのままだと早死にするわよ。」

「……確かに、私はこの事件に執着しています。おそらく今回の教育係に任命した角宮部長も、そのことを察して、彼女をそばに着けたのでしょう。安全装置のために、私が先走らないように。」

「なら『ですが……私は止まりませんよ桂木さん』……。」

「私は、あいつのために、この事件の犯人を必ず見つけなければいけない。絶対にだ。」  
「あの子が修也君を慕っていても？明らかに彼女、あなたに好意を寄せていると思うけど……。」

「ええ、たとえ臼井が私に好意を寄せていたとしても、いま言ったことを変えるつもりはありません。」

「……わかつたわ。でも死んじや駄目よ。また若い子が死ぬのは悲しいわ。」

「勿論です。どんな危険な目にあつたとしても、彼女だけは守ります。私の問題に、彼

女を巻き込めませんか。」

「彼女だけじゃなくあなたもなんだけどね……。」

「……善処します。」

修也の執着心に気づいて忠告した美佐江だったが、彼の強い意思に、美佐江はなくなつてしまった。

「じゃあ、私の話はこれでおしまい。さあ行つた行つた！」

「呼び止めたのはあなたでしょうに……ありがとうございます桂木さん。あと、この事件の遺留品も警察から取り寄せるのでその分析もお願いします。」

ガチャン

美佐江の話も終わり、修也は部屋を出ていった。一人部屋に残つた美佐江は、椅子に座り

「（全く、忙しいって言ったばかりなのに、置き土産にまた仕事を増やして……。頑張りなさい二人とも。死ぬんじゃないわよ。）さてと、仕事仕事。」

手間のかかる弟の世話をする姉のような思いに駆られながら、仕事を始めた。



部屋の外に出ると、そこでは律子が待つていた。

「あつ先輩！お話は終わりましたか？」

「ああ終わったよ。待たせてすまんな。」

「いえいえ。先輩、次はどこに行くんですか？」

「事件現場に向かう。警察が何かつかんでるかもしれない。」

「ついに現場ですね。楽しみですよ！」

「余りはしゃぐなよ。」

「わかつています！」

そして、二人は科学分析室を後にする。ちょうど二人の後姿を見た分析官の一人は、一見仲がよさそうにみえるも、その実二人の間には歪な溝が引かれているように感じた。そして、その分析官は同時に、その構図に一時の哀愁も感じたのだとか。これが彼らの今後にどう影響していくのか。それはまだ、誰も知らない。



互いにすれ違う想いのかたち。果たして、この二人の武装検事が真のバディとなる日は訪れるのだろうか……

次回、第肆話臨場  
p a r t 1

## 第肆話 臨場 part 1

科学分析室を後にして、事件現場に向かうことになった修也たちは、現在車で都内を移動していた。まず彼らが向かう先は、修也が居合わせた最初の爆発現場である都内中心に位置する高層ビルだった。事件の足取りを追ううえで、事の始まりから探っていくのは当然のことである。それに倣い、修也たちも件の現場へと向かっていった。修也の愛車であるBRZご存知の通りスバルのスポーツカー。作者は86よりBRZ派です（どうでもいい）。ただの車ではなく、武偵時代の知り合いにカスタムしてもらった特別仕様で、かなり飛ばせる（小並感）。カラーリングは黒。が心地よいエンジン音を奏でながら駆け抜けていく最中、目の前の信号が赤へと点滅し、車は一時停止した。それに合わせるように、助手席に座っていた律子が口火を切った。

「先輩、これから向かう現場ですが、犯人は何を目的にビルを爆破したのでしょうか？あそこはオフィスビルで、爆発したフロアに入居しているテナントもこれといった点がありませんし……。」

律子が疑問を投げかけると、運転席にいる修也は前を見ながら答えた。

「事件現場自体に犯人の目的はないだろう。今回、俺はある情報筋からイ・ウーに関する

情報を入力して、現場で張り込んでいた時に事件に遭遇したわけだが・・・結果は知つての通り倉庫で取り逃した。だが、今回の件、少なくとも俺を誘き寄せたものであることは間違いない。倉庫で奴と話した時、俺のことを知っていたことから、情報もおそらく奴が敢えてリークしたんだらう。」

修也が答えると、律子は再度疑問を投げかけた。

「つまり、先輩を誘き寄せるためだけに爆発を起こした・・・先輩は以前からイ・ウーについて捜査していたから犯人に目をつけられたということでしょうか？」

信号が青へと変わり車が発進すると、修也は運転しながら答えた。

「そうかもな、しかし、今まで尻尾も掴めなかった組織の一員と思わしき男が、突然現れた。それも宣戦布告するかのように・・・なんにせよ、あちらから動きがあったんだ。奴らに近づく機会を得た今、この事件、徹底的に調べるぞ。白井。」

修也がそう言うと、律子も答え、

「はい！先輩のお役に立てるように全力で取り組みます！ところで、先程の話にあったある情報筋とはなんですか？S公安警察の情報提供者。コロン映画でも登場していました（安〇さんがカツコよかったです）。のように武装検事も独自の情報源を持っているんですか？」

彼女も決意を固めたようだが、どうやら先ほど修也の話でたある情報筋に興味があ



るようだ。

「ああそれか。確かに、他の武装検事にもそれぞれ独自の情報源を持つものがあることはいるが、全員というわけではない。俺の場合は、そうだな・・・腐れ縁といったところか、昔からの付き合いで今もこうして情報をもたらうことがある。」

勿論ギブアンドテイクでな。という修也に対し、律子は、

「もしかして武偵時代のお知り合いですか？」

武偵時代の知り合いなのか尋ねた。律子は、武装検事局の中で武偵だった時の彼を知る唯一の人物なので、容易にこの考えに至った。この問いに修也はうなずき、

「・・・当時東京武偵校にいた時、組んでいたチームの一人だ。優秀で、こと情報収集にかけてあいつの右に出る者はいなかった。まあ面倒くさがりなのが玉に瑕だったが・・・。」

まるで郷愁に浸るかのように話す修也であったが、

「・・・もしかして女性ですか？」

ポンコツ乙女甲子は持ち前の分析能力を發揮し？、修也の言動や表情からその人物が女性であるのではないか疑いを抱いていた。

なんでそうなる？

そして、この問いに修也は、

「よくわかったな白井。流石の分析能力だ。」

何故か素直に感心していた。まさか、これだけの情報で見破られるとは思ひもしなかったのだ。彼は普通に律子の能力に感心していたのだ。というのも、彼は、科学分析室で美佐恵とこんなやりとりをしていたのだが、

『あの子が修也君を慕っていても？明らかに彼女、あなたに好意を寄せていると思うけど。』

『ええ、たとえ白井が私に好意を寄せていたとしても、今言ったことを変えるつもりはありません。』

この時、修也は律子の好意に気づいているかのような発言をしていたが、

『慕っている？まあ、彼女とは長い付き合いだし、俺に対する好意は親愛によるものだろう。』

・・・全然認識が違っていた。

この男、何故か鈍感主人公ムーブを決め込んでいた。仮にも優秀な武装検事であるにもかかわらず、修也は律子の恋愛感情を理解できなかったのだ。

お前それでも武装検事かよ!?

こんな調子であるからして、当然律子の気持ちに気づくことなく勘違いしているのである。

律子哀れなり（でもフラグは折れきってなかったよ！やったね！）。

鈍感主人公<sup>修也</sup>の素直な賞賛に対し、律子はというと、

「ありがとうございませす（やつぱり・・・もー！先輩の身近には何人女がいるの!? さっきの桂木さんもそうだけど、その女性ともなんだかんだ仲がよさそうに見えるし・・・このままじゃ先輩が盗られる!!」。

相変わらずのポンコツっぷりを披露していた。

「さて、そろそろ現場に着くぞ。マスクミヤ野次馬がいるだろうが気にせず一気に行くぞ。お前は何を聞かれても答えるな。」

そんなこんなで現場に着きそうだったので、修也は現場についた時の説明をする。武検局のテレビで見た時、現場にはまだマスクミヤなどが多くいることはわかっていたので。

「了解です。」

さつきまでポンコツっぷりを披露していた律子も、流石に気を引き締めたのか真剣な表情になった。

「さあ、あれが現場だ。」

両名はついに現場へ到着した。



現場に到着した修也たちの前に広がっていたのは、修也の予想通り騒然としていた光景だった。事件発生からすでに10時間近く経過していたが、すでに臨場していた警察が貼っていた規制線の前で、マスコミが現場の状況を伝えており、この状況に野次馬が少なからず湧いていた。警察も後処理に追われているようで、この喧騒が冷め止むことは未だなさそうだ。

「現在私は、本日未明に爆発が起きた高層ビルの前にいます。爆発が起きてすでに10時間ほどが経過していますが、未だ現場は混乱している状態です。警察によりますと……」

どうやら先程テレビで見たのとは違う番組のリポーターがいるようだ。リポーターは、現場の状況を話しており、カメラマンはリポーターとその周りの光景を舐めるように撮影している。

「近づいてみると本当に人がいますね。」

「都心のど真ん中で起きたからな。マスコミも余計駆けつけてくるだろう。」

歩きながら、そんなことを話していた二人だったが、野次馬がそれなりにいたので規制線の前まで野次馬の中を通りながら進んだ。

「失礼。」

「すみません、通ります」

そんな様子が目に入ったのか、現場の状況を伝えていたりポーターが、

「……であるらしく、現状これがテロであるかは不明とのことですが……？あれは：どうやら捜査関係者のようです。」

カメラに修也たちを写すように指示した。そして、彼らに近づいていくと、

「武装検事だ。通してもらうぞ。」

修也が武装検事手帳武装検事の身分証。機能は現行の警察手帳と同じで開くと上面には写真（検察官記章をつけたスーツ姿の写真）、肩書き（武装検事との表記）と氏名が日本語と英語で併記され、IDも載っており、検察官記章のホログラムが表示された身分証票。下面には金色の金属製の記章があり、上部にはAGENT、下部には武装検事局の文字がある。研修期間を経て正式な武装検事となったものに渡され、常時携帯が義務付けられるほか、勤務外でも身につける必要がある。を警察官に提示しており、その光景を見たりポーターは修也たちに詰め寄って、

「すみません！○◇テレビですが、武装検事が何故現場に？今回の爆発は何か重大な事件に関係しているのでしょうか？お聞かせください！」

「現在捜査中ですので。」

詳しく話を聞こうとしたが、修也は淡々とあしらっており、詳しい内容を聞くのは無理そうだと悟ったりポーターはその矛先を律子へ変えた。

「今回同時期に起きた港湾地区での爆発との関連性はあるのでしょうか!? 連続爆破事件の可能性は!?」

「!?.....」

律子は、自分に矛先を変えられ、動揺しているようだ。武装検事とはいえ、まだ新人の彼女にとっては、このような経験に慣れていないので仕方ないだろう。

そんな彼女の様子に気づいたのか、修也は咄嗟に彼女の前に躍り出て、

「現在捜査中ですので、情報はお伝えできません。行くぞ。」

「あっはいー!」

簡潔に話を切り、律子に声をかけ規制線の中へと入っていった。声をかけられた律子は、その声に従い修也についていく。

「あっちよつと! 待ってください!」

後ろからはリポーターの声が聞こえ、律子は少し振り向きそうになるが、

「気にするな。前を向け。」

「つつーはいっ!」

再度修也に声をかけられ、律子は嬉しそうに返事をしたのだった。そして、2人はビ

ルの前へと近づいていくが、ビルの中からスーツ姿の男が出てきた。

「ん？これはこれは、今更武検局からおいでなされたのですか？神谷武装検事？」

「中道か。まさか公安0課が関わってくるとはな。悪いがこの事件はうちが貰つていくぞ。俺が追つていた事件だからな。」

「まあいつもならお互い管轄争い武装検事局と公安0課は互いにマードライセンスを所持していることもあり、その仕事内容からしばしば管轄権が被る時がある。その時は、力で解決するのがもはや慣例となつており（要するに早いもの勝ち）？たまたま血を見る争いが繰り広げられる（両者とも仮にも行政組織の一員である）。修也も何度か公安0課と争つた経験があり、特に獅堂虎巖と戦うことが多い（勝敗は現状引き分け）。をすると争つていますが、いいでしょう。今回はお譲りしますよ。貴方が関わる事件なら、今はまだ手を出さないでおきましょう。」

「そうしておけ。邪魔をするなら叩き潰すぞ。」

「いやはや恐ろしい。肝に銘じておきます。」

この嫌みつたらしい男の名前は、中道傑なかつちやく。公安0課の一員で、尋問と暗殺術のスペシャリストである。普段はこうして現場に赴くこともあり、修也とは面識がある。

「では後は任せましたよ。検討を祈ります。」

「思つてもないことを……。」

「本心ですよ。．．．しかし貴方が教育係を務めるとはねく可愛らしいお嬢さんだ。」

中道は修也の隣にいる律子に目が入り、声をかけた。

「初めましてお嬢さん。僕の名前は中道傑、君と同業の者だ。今後也會うことがあったらよろしくね。」

「はっはい。白井律子です。よろしくお願いします。」

律子に自己紹介すると、彼女も少し慌てて名乗り返した。

「律子ちゃんか。いい名前だね。．．君が死ぬ時は一体どんな表情をするのか気になるよ。」

「え?」

律子の名前を聞くと、中道は突然おかしなことを言い始めた。そのことに思わず、疑問の声をあげた律子だったが、中道は構わず続ける。

「いやね? 職業柄人の生き死にを見る機会が多いものだから、何か面白いことはないかと思つてね。そうしたら気づいたんだよ。人の死に様の表情を。気づかずに平然とした表情の者もいれば、感情を剥き出しにする者、はたまた死を受け入れ得心のいった表情をする者、本当に色々な人がいるんだ。それを見ているうちにね、思つたんだ。もし今日の前にいる人が死ぬ時、一体どんな表情をするのか! ああ! 僕は気になつてしようがない。今まで、犯罪者だけを殺したが、そう! 例えば武装検事を殺したら一体どんな



『そこまでにしておけ。』っ！・・・。」

その時、重厚な殺気が中道を貫き、思わず彼は饒舌な口を噤んだ。殺気に当てられた彼は、瞬間、息が止まり、時間が止まり、体が全く氷漬けされたかのように動けなくなり、汗がでてきた。そして、その汗が頬を伝うまでの時間が永遠に感じられるくらい、彼にとってこの時は長く感じるものだった。

修也が喋った途端、突然彼が喋らなくなったことに、律子は躊躇しながらも声をかけた。

「あつあの。大丈夫ですか？」

「・・・。」

律子の声かけに対して反応しなかった中道だったが、その様子を見た修也は殺気を緩め、

「それ以上俺の部下に戯言を言うな。次はこれで済まないぞ。」

「・・・ええ、わかりました。やれやれ、これ以上やり過ぎてしまうと本当に私の命がもたなそうだ。」

彼に警告し、中道は少々やり過ぎたと自覚したのか、落ち着きを取り戻した。

そして、今度こそ現場を後にしようとして歩き出し、最後に伝えることがあったのか途中で立ち止まり振り向いてきた。

「では私はこれで。そうそう、獅堂君が貴方とまた戦いと言っていましたよ。」  
そう言うのと、修也はそれに答え、

「そうか。また叩きのめされたいのなら構わないと言っておけ。」

「ええ、そう言っておきますよ。」

中道はそれを聞くと、修也たちに背を向けて現場を後にしていった。

「先輩、あの人は一体……」

ようやく中道が去り、律子は落ち着きながら修也に彼について尋ねた。

「あいつは公安0課の中でもとびきりのサイコパスだ。」

「……公安0課はああいう人たちがたくさんいるんですか?」

「あいつほどではないが、それなりにおかしいのはいるぞ。」

「もつとまともなものだとばかり思っていました……」

「まあ、慣れるしかないな。」

公安0課のイメージがあまりにも違い過ぎて、遠い目をしている律子と、もう慣れたのか平然としている修也だったが、

「さっきのマスコミに加え、頭のおかしい公安0課。まさか現場に来て早々こんなに疲れるなんて。」

「……」

「どうやら律子はあまりにも突然のことが多すぎて疲弊しているようだ。そんな様子の彼女に修也は、

ぼんっ

彼女の頭に手を置いた。

「ふえ？」

「まあ、そのなんだ。初めての現場で、いきなりこんな経験をするのも滅多にないことだが、あまり気負いすぎるのな。これは実地研修でもあるが、もつと気を楽にしないと仕事が疎かになるぞ。俺としては、初めての教育係で至らない所もあるかも知れないが、お前とは長い付き合いなんだ。できることならこの研修で落としたくない。だから頑張れ、律子。」

かあああ／／／ボンツ／／／！

あまりの不意打ちに思わず反応が遅れ、その後の修也の言葉に律子の顔はみるみるうちに赤面していった。そればかりか、頑なに言っつてこなかった自分の名前を言われ、彼女の頭は限界突破した。

その結果。

「プシュウウウ／／／／」

彼女の頭はショートした。

「?おい、どうした。」

修也は彼女の変化に気づき、頭から手を離して声をかけるが、

(@H@)「フニャー／／」グラッ

彼女は目を回しながら倒れそうになった。

「おいっ!」

咄嗟に動いた修也は、彼女の腰に手を回しゆつくりと地面へ下ろした。

「危なかった・・・全く、突然どうしたんだ?」

修也はわからないとばかりに、律子の様子に終始疑問符を浮かべていたが、この一部始終を見ていた警察官たちは皆思った。

「(何現場でいちやついてんだ。)」と。



次回、第伍話臨場 part 2

## 第五話 臨場 part 2

夢を見ていた

むかし  
昔日の夢を

忘れもしない、あの人に出会った日を

あなたが私の前に現れた時

「あなたは、一体……。」

あなたは、私に振り向いてこういった

「俺？ただの武偵だよ。」

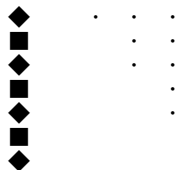
そう答えたあなたの目は、とても優しげで、

ただその一言が、あの時、冷め切っていた私の心を温かく包み込んでくれた

私はあの人に憧憬しやうけいを抱き、その日以来、私は変わったのだ

全ては、あの人に追いつくために

そのために、私は……



現在、修也たちは件のビルくだんのエントランスに留まっていた。

というのも、先程突然倒れた律子を介抱した修也であったが、気を失ったのか中々目を覚さない彼女を一人残して行くわけにもいかず、彼は現場のエントランスにあったソファアーに彼女を横にし、その側に座って彼女が目を覚ますまで待つこととなってしまった。

おかげで、到着してから未だに爆発が起きた階にも行けず、待ちぼうけを喰らうことになったが、現場の状況などは担当の刑事がわざわざ教えに来てくれたため、現場の一通りの内容は理解できた。

「以上が、現在判明している現場の状況です。鑑識作業などは終わっていますので、現場には一応入れますが、どうされますか？」チラツ

「ああ、復帰したらすぐに向かうよ。わざわざすまないな。後で正式に通達するが、この

事件はうちが預かる。すまないが、捜査資料などをこちらに送る手配もつけてほしい。」  
武装検事局

「わっわかりました。では上にはそのように伝えときますので、どうぞごゆっくり。」  
刑事は、いやに此方を伺いながら、よそよそしく去っていった。

余談だが、武装検事は、その性質上、警察権の及ぶ範囲と重なることが多い。そのため、武装検事はその職務内容に鑑みて、他の捜査機関を優越した捜査権を保持している。そのせいか、今回のように、警察の仕事を後から搔つ攫つてしまうこともざらにあるので、基本的に彼らのこちらを見る目はあまりいいものではないのだが・・・どうやら今回は些か様子が違うらしい。

「(? なんとというか、いつもと違う様子だ。いつもは敵視してくる視線が多いはずなのだが、これは何だ? 敵視といっても別のものである感じが・・・。」

その元凶①である鈍感系主人公(笑)は、その優秀な頭脳を働かせても、理解できずにいた。

まあ、彼の鈍感さは前話にて判明したことであるが、それ以上に、真の元凶はその隣で寝ている、

ううん「せんぱい。私は、私は。」

この女律子であった。

衆人環視のなか、現在進行形で醜態をさらしている彼女は、気絶したときもそればかりのものだったが、それは単なる序章に過ぎなかったのだ。

目を覚ました時には、きつといろいろな意味で後悔することになるだろう。いや、確実に後悔する（確信）。

あまつさえ、

「せんぱい〜」ガシッ

ちやうど立っていた修也のズボンのすそを掴む始末。普段なら絶対にやらないであろうことをしでかす彼女に、

「はー。全く、困ったやつだ。」

さすがの修也も困惑せざる得なかった。

しかし、彼らの心中はどうあれ、傍から見ればその光景は現場であることも相俟あいまってつて、

『『イラッ（このリア充が!!!）』』

こうなつて（嫉妬の目で見て）しまうのは致し方ないといえるだろう。

このある意味修羅場のような雰囲気は、しばらく絶えることはなかった。

「わ〜せんぱいだ〜。」

真の元凶は、一切知ることもなく。





「ドヨン」

結論から言うと、こうなった。

時は少し遡り・・・

あれから少しして、目を覚ました律子は自らの状況を理解した途端、気絶したとき以上に顔を真っ赤にし、

『うん～うん？（あれ、私はなんでソファァーに：：！？あ、あああ！わっ私は、あの時せつ先輩に慰めてもらって、それから・・・うううう／／／』

案の定後悔した挙句、

『あの時先輩に、なっ名前で呼んでもらって／／／、それから：：』「やつと起きたか。！？せつ先輩！？あつあの！わたs「起きたなら行くぞ。時間が押しているからな・・・あと、これは減点対象だ。次は容赦しないぞ。いいな？」・・・はい・・・。』チーン

憧れの存在から幻滅されてしまい（まあこい純感系主人公（笑）つにも責任の一端はあると思うが）、自身の醜態以上に心をえぐられる結果となった。

そして時は戻り・・・

修也たち一行が乗るエレベーターの中は、絶賛お通夜状態となっていた（主に律子が）。

そんな気まずすぎる密閉空間において、修也は律子へと語りかける。

「なあ白井（呼び方戻ってる）。」

「はい……。」

「今のお前は少々浮かれすぎていないか？」

「……。」

「現場に出るのは楽しいか？ 知己ちぎと仕事できるのは嬉しいか？ だがな、お前も武装検事として、今後とも職務を遂行するならその感情はしまえ。目障りだ。」

「ッ……。」

「お前が優秀であることは俺が知っている。だからこそ、知己としても、教育係としても、お前には職務を全うしてほしい。」

「先輩……。」

「それでも、この仕事が無理なら、別の仕事を紹介しても「いえ！ 辞めません！ 私は必ず職務を全うします！」……なぜそこまで拘る。あの時からそうだ。お前はどこまでも俺に付いてこようとする。俺と同じ職業を選んでまで……。そこまでの価値がお前にはあるのか？」

律子に説教をする修也。その中で、彼は測ろうとしていた。

彼女のうちに秘めた、思いの丈を。

「・・・それも全ては、あの時のことがあったからです。私が絶望に打ちひしがれていた中、先輩が現れたとき、不思議な気持ちになりました。それからはご存じの通り、先輩に追いつきたい一心で、ここまで追いかけてきました。私は知りたかつたんです。この気持ち。」

「・・・それで、答えは得たのか？」

「ええ、少しは。きつと私は憧れていたんだと思います。あの時、先輩が見せてくれた正義に。だから、私は武装検事として、この仕事に誇りと使命をもって挑みます。いつか私も、先輩のように、誰かを救えるようになりたいから。」

「ッ」

その瞬間、修也の脳裏にある光景がフラッシュバックしていった。

『修君の正義は、きつとこれからいろんな人を救うんだろうな。』

『私は、そんな君が好きだよ。勿論、チームの一員としてね!』

『・・・じゃあね。修君。』

「?先輩、どうされました?少し顔が険しくなっていますが。」

「!ああッ、すまない。・・・白井の思いはわかった。そうならば、前言を撤回する。今後もその思いを糧に、仕事に邁進してくれ。」

少々ぎくしゃくしてしまっただが、話を重ねたおかげで、無事解決したようだ。

これで、二人の仲は元通りに・・・

「はい!ところで先輩!さつきみたいに名前前で呼んでくれないんですか?私が倒れる前に言ってくれたじゃないですか。」

「いや。少し甘やかしてまったようだから、しばらく禁止だ。」

「そんなッせめてもう一度だけでも・・・」

「調子に乗るな。」ベチツ！

「いたッ！」

元通りに・・・なった？

「いったく!?、デコピンの強さじゃない。」

少し涙目になっている律子を見て、笑みを浮かべながら修也は思っていた。

「ふっ・・・（ああ思い出した。そういえば、お前はそんなことを言っていたな。俺の正義か。今の俺にあるのは執念だけだ。お前に合わず顔もないが、俺はただ突き進むよ。それが、今の俺の正義だから。）」



現場を見終わった修也たちは、エントランスに戻っていた。

「初現場はどうだった。」

「やはり、資料で見るとは違いますね。実際に現場の雰囲気を感じて、その場でしか得られないだろう感覚を味わえました。」

「時にその感覚も、捜査において重要なファクターになる。忘れるな。」

「了解です。」

現場ではすでに、警察の鑑識が検証していたことは述べたが、その結果を資料で客観視するだけでなく、主観的にも事件を俯瞰ふかんことで、時に新たな発見を得ることもできるのだ。

果たして、今回の事件からは、それが得られたのだろうか。

「先輩が刑事さんから伺ったことを考慮すると犯人は只者ではないですね。まあ、先輩から逃げ切った時点でそれは確定事項ですが。」

「ああ、刑事によると、事件当時の監視映像は見事に軒並み消されていたらしいが．．．やはり特筆すべきは爆弾だ」

「ええ、あそこまで限定的な爆発を起こすとなれば、恐らくプラスチック爆薬C-4やセムテックスなどといった可塑性爆薬かそせいのこと。粘土みたいに簡単に変形することができ、が使用されたのでしょうか。それも最上階のフロアだけを効果的に爆発するとなると、精密な計算を必要とします。犯人は、IT技術のほかに、爆薬の専門的な知識を有していることは間違いないですね。」

「そうだな。厄介だが、幸いなことに今回の事件がテロである可能性は潰れた。テロリストなら、多くの人間がいる時間帯に爆破する方が効果的だし、何かしらのメッセージも発信するはずだ。現場にはそれはなかったし、世界中のテロリストが声明を発した様子はないとのことだ。」

「となると、今のところ私怨による犯行である可能性が高いですね。先輩の話も考慮すると、今回の事件が先輩を狙うために行われたのならば、先輩に恨みを持つ存在、またはあの組織の報復でしょうか？」

「どちらにせよ、俺個人を狙った犯行に違いない。今回の件は、その副産物に過ぎないということだ。」

「ですが、犯人への手掛かりは見つかりませんでしたね。例の3Dモデルの照会を含め、あとは、科学分析室の鑑定待ちですね。」

「どうやら、犯人につながる新たな発見を得るに至らなかったようだ。」

しかし、修也は話を続ける。

「だが、ある程度の状況はわかってきた。組織の可能性も考慮するが、まずは俺の周辺から調べていくとしよう。武偵時代の記録も含めて総ざらいだ。」

「その中で、事件前後気になる動きをしたものでも見つければ、手掛かりになりそうですね。が……。」

「そううまくはいかないだろうな……。ともかく、次の現場に向かおう。あそこは俺も事後処理をしていたから特に行く必要はないが、せっかく実地研修も兼ねているんだ。経験のためにも行って損ではないだろう。」

「ほんとですか！……いえ、そうですね。経験を積む機会は早々訪れないんですから積

極的にかかわりたいです。」

「ほくようやくくしおらしくなってきたな。(きっきの説教が効いたのだろうか。)」

「勿論です。(武装検事として、先輩の隣にいたためにも改めなくちゃ!でも、やっぱり先輩と二人つきりになる時間が増えるのは嬉しいし、WINWINだね!)」

「どうやら、今後の方針が固まったようだ。律子の本質的な部分が変わっていないのはご愛敬だとしても、ついさっきまでとは少し出で立ちが変わったような気がしなくもない。」

現状、犯人の正体はいまだ不明、その目的も定かではないことに変わらないが、彼らは少しづつ真相へと足を踏み出していくのだった。



場所は変わって、舞台は第二の爆発現場である港湾地区の倉庫に移り変わっていた。まさに、修也と謎の男のファーストコンタクトが行われたこの場所に、修也たちは足を運んでいた。

日が昇り、当時の時間帯よりも倉庫の惨状がよく見えたが、それを見た律子は。

「跡形もなく吹き飛んでいますね。ほんとに倉庫があつたんですか?」



「ああ、あの時は燃え盛りながら倒壊していたが、そのなれの果てだな。」

目の前の瓦礫の山に対して、そう述べた。

そう、彼らの眼前に広がる光景には、倉庫の面影は微塵もなかったのだ。これでは、あまり収穫が見込めないだろう。

「奴が乗っていた車も、倉庫前に停めてあったせい、瓦礫の下敷きになった。そこから、痕跡を見つけないのは困難だろう。ナンバーと車種は記憶していたが、昨日盗まれた盗難車だったらしい。警察には、自動車窃盗の面から、捜査を行ってもらっている。手掛かりがでてくる可能性は、限りなく低いだろうが。」

「それでドジを踏むようなら、苦労せずに済みそうですが……ここまで用意周到に計画していたとなると、犯人、相当先輩に思い入れがありますね。さらに、その謎の男？が話した通りなら、今後もこのようなことを仕掛けてくるのでしょうか？」

「ああ、死傷者はまだ出ていないが、これはほんの序章に過ぎないだろう。いつ犠牲者が出るのかわかったもんじやない。(俺以外に死傷者が出るのは必ず防がなければ……)。」

そう話す修也の眼は、もはや自己犠牲も厭わないものだった。この事件に対して、異様な執念をみせる彼はこのままだと、自身の命も顧みず、本当に死に急いでしまうかもしれない。

そんな雰囲気を感じた律子は、悲しげな眼で修也に顔を向ける。

「(先輩……)確かに今後犠牲者が出るのは看過できません。ですが、それは先輩もです。先輩に何かあつたら、私許しませんから。」

「ああ善処するよ。」

そう答えた修也の口調からは、とてもそうには思えなかったが、律子はこれ以上追及しなかった。

しかし、

「約束ですよ。(もしあなたと二度と会えなくなつたら、私は……)」

その元凶を徹底的に薙り殺しにして、私も死にますからね？

白井律子は馳せる。狂気の色香を纏わせながら。



結局、この現場では律子に色々と教える以外、特筆すべき事柄はなかったため、修也たちは、少し暇を持て余してしまった。

港湾地区であるこの場所は、当然ながら東京湾に面しており、現場はまさに海のすぐそばにあった。

だからか、海を見ながら二人は佇たたずんでいたのだった。

「潮風が気持ちいですね。」

「ああ。事件当時もそうだったが、夜が明けるとこんな風に見えるのか。いい景色だ。」

「そうですね。あ、先輩！あそこに見える人工島つてもしかして。」

その時、ふと何かに気づいたのか律子はある方向に指をさした。

そこには、

「……ああ、東京武偵高校のある人工島だ。そうか、ここから見たのか。」

「あそこに、先輩の母校が・・・一度行ってみたいです！」

「そうだな、武偵高では毎年文化祭があつて、一般の客も入ることができるとし、そういえば5月末にはアドシアードがあつたな。」

「アドシアードですか？」

「武偵版の国際大会だ。武偵のイメージアップとしてもよく行われているな。例年、多くの一般客が観戦しているぞ。」

「面白そうですね？」

「ああ、伝統的に行われる余興もあるな。もしかするとそっちのほうが人気かもしれない。大会といつても、専門知識がないとその凄さがあまり伝わりづらいからな。（あの余興は正直危ない気もするが。）」

「へく面白そうですね。見てみたいです。」

「そうか、ならこの事件が片付いたら行ってみるか。」

「え!?! いいんですか!?!」

「仮にも母校だからな。折角だ。案内しよう。」

「本当ですか!?! 楽しみにしています！（やったー!?!）」

さつきとうつて変わって内心かなりはしゃいでいる律子。

チヨロインである。

「武偵高か……。」

修也は、かつての母校がある島を見つめ続けていた。

そこには、彼にとってかけがえのない思い出が詰まっているから。



時は遡り……東京武偵高校の放課後の教室。そこには二人の生徒がいた。

バンツ！『ちゅうもーく!!』

突然、ドアが開け放たれ、一人の生徒が元気よく現れた。

『《vid:l》いつもバカ騒がしいな。もっと慎ましくできないのか？《vib》』

それに反応する一人の生徒。どうやらこれは、日常的な出来事らしい。

『……』カタカタカタカタ……

もう一人の生徒は、反応することなくパソコン作業に没頭していた。

こんななか、相も変わらずのテンションでその生徒は話し続けた。

『いやー急いじやって。そ・れ・よ・り・重・大・発・表・が・あ・り・ま・す!』

『……』カタカタカタカタ……

『……ちよつと!二人して黙らないでよ!?!寂しくなるじゃん!?!』

まさかのシカトに、思わずその生徒は涙目になった。

『いや、お前のことだから碌な事じゃないだろう。』

コクン『……』カタカタカタカタ……

最初に反応した生徒がそう述べると、パソコンに没頭していた生徒も同調して頷いた。

どれだけ信用がないのだろうか。

『ぐぬぬ……。ふっふっふ、しかーし！今回は一味違うのだよ諸君。何と！今回、私たちのチーム編成の申請をしたのだ！』

どや顔でそう述べた生徒に、聞いていた二人は、

カタカタk『……は？』

思わず声を漏らした。

『さらに！私たちのチーム名もすでに……あれ？どうしたの二人とも。動きが止まっているよ。』

突然の宣言に、思わず固まってしまった二人だったが、その中で一人がなんとか言葉を紡いだ。

『……本当に、本当にこの3人でチームを編成したのか？俺たちに断りもなく？』

『え？だって今まで、この3人で任務をこなしてきたでしょ？だったらこれから先も任

務をしていくなら、チームを組むのが妥当でしょう?』

『……だからって、断りなくするやつがいるかあ!』ゴツン!

そのあまりの身勝手さに、その生徒は近づいて拳骨を下した。

ゴチン! 『いたい!』

拳骨をされた生徒は、さつきとは違う涙目を浮かべながら頭を押さえて、拳骨を下した生徒をにらんだ。

『うー。殴らなくてもいいじゃない。』

にらむ生徒に対し、拳骨を下した生徒は溜息を吐きながら真剣に話す。

『はーいいか。確かに、俺たちは何度も苦難を共にしてきた。実質チームというのはあながち間違いいではないだろう。『!じゃあ『だが!』……』俺は、お前たちとは行く道が違うんだ。このチームを登録するということは、将来的に武偵として活動するうえで、このチームで活動していくことになるんだ。だから、簡単に俺をチームに入れるな! チーム編成は、今後武偵として生きるうえでの生命線なんだぞ! もつと慎重に考えろ!』

その生徒の言葉に、にらんでいた生徒も次第に真剣な目になり、生徒が話し終わると、口を開いた。

『それを承知のうえでのチームよ。勿論、あなたが将来的に武偵として活動していくつもりがないのは知っている。でもね、それでも私は、たとえ一時の間であっても、最高のチームを組みたい。』

『ツ……。』

『ねえ、だからそれを抜きにした、あなたの考えを聞かせてほしいの。』

その生徒が向けたまなざしと思いに、先ほど話した生徒は黙し、逡巡した。そして、口を開きかけ、

『俺は……』

『あのー私を置いてけぼりにしないでくれますか?』

『あ。』

二人はここに至るまで、あまりに影が薄かったため、もう一人の存在を忘れてしまっていた(※なおこの生徒が発言するまでに発した言葉は1文字である)。

というか話すんだ。

『ごっごめん。勿論!あなたも含めて3人で最高のチームを作りたいのよ?』

『わかっています。まあめんどくさいですが、どのみちチームを組まないといけないので構いませんよ。』

『ほんと!?よかったー、じゃああとはあなただけね。』



『・・・はい、わかった。俺もチームに入るよ。』

『よし！これで全員の承諾をえたわね！』

『どうなっても知らないぞ。』

『大丈夫！さて、こうしてチームを結成することだし、やっぱりチーム名が必要よね？』

『まあそうだな。』

『では、発表します！私たちのチーム名は・・・』



チーム結成を承諾してからしばらくして、現在、彼らはカメラの前でデイヴィーザ・ネ口を着用していた。

これを着用しながら、斜めに向いて写真を撮るのが基本的な流れだ。

『ふふ。二人とも、似合ってるわ。』

『嬉しそうだな。』

『当然！やつと私たちのチームとしての第一歩が始まるんだもの。』

『はい、早く終わってください。』

『もー、こんな時くらいシャキッとできないの？』

そろそろ撮るぞ〜

『あ！ほら二人とも構えて！』

『ああ。』

『・・・。』

3, 2, 1・・・

カシヤツ！

こうして、後に武偵界に歴史を刻んだ武偵チーム、「チーム・ハウন্ズメンバー」は3人とごく少数でありながら、数多の難関依頼をこなした武偵チーム。そのメンバーは、それぞれ各分野で世界トップクラスの實力を誇るSランク武偵で、たとえ個人であったとしても引く手あまたの實力者たちだった。しかし、多くの功績を積み重ねていく中で、突然のチーム解散を宣言し、武偵界は騒然とした。彼らの活動期間はわずか2年と短いものだったが、その記録は現在においても語り継がれ、文字通りの伝説の武偵チームとして大きな爪痕を残した。ハウন্ズ（Hounds）は英語で猟犬を意味し、チーム名を命名したリーダーは「我々は、武偵が誕生する際求められた凶悪犯罪の減少、これを実現するため、武偵法と武偵憲章に則り、犯罪者の迅速な発見、確保を理念とし、命名しました。」とインタビューにおいて発言した。」が結成された。このチームの活躍は目覚ましく、その記録は今も伝説として語り継がれている。

しかし、突然の解散宣言を経て、ハウন্ズは2年の時をもって解散した。それでも、各

メンバーは個人で武偵としての活動を継続し、時には一時的なチーム再結成を行っていた。

武偵界では、チームの復活を望む声が多かったが、ある日を境にその声はなくなった。なぜなら、

そのチームの中心的存在であったリーダーが、死んだからだ。



次回、閑話E p i s o d e o f R i t u k o 若き正義の懸想



## 第0. 5話 発端

「ハアツハアツハアツハアツ！」

人気がない路地裏で、男は走っていた。ただひたすらに、怒りと恐怖が入り混じった顔をしながら、ただただ走っていた。

しかし、ここまで休むことなく走り続けていたためか、どうやら限界が近づいているようで、自身に残るわずかな体力を駆使しつつも、その体はもはや、耐えきれなくなっていた。

男は一旦立ち止まり、ひと呼吸する。

「ハーツハーツハーツ……ここまで走れば大丈夫かな？」

立ち止まった男は、深く呼吸をしながら来た道を振り返る。外灯の明かりが届いていないそこには何もなく、ただただ暗闇が広がっているのみだった。

その光景に落ち着いたのか、男はいったん壁に背中を預けた。

「……足止めはうまくいっているか。これならなんとか逃げ切り」残念だが、そうはならないぞ。」!？」

突然の声に驚く男。再び男が振り向くと、暗闇の中から一人の男が現れた。

見た目は若く、20代半ばといったところか。スーツを身に纏い、現れた男。右手には拳銃が握られており、その様相はまるで、死へと誘う死神のようだ。

その姿を見た男は、再び汗を滲ませた。なぜなら、その男の存在もそうだが、微塵の気配を感じさせず、いつの間に至近距離に詰め寄ってきたことに、多大な危機感を覚えたからだ。

「…ほかのメンバーはどうしました？ それなりにいたはずなのですが。」

男は、追ってきた男に対し、質問をなげかけた。少しでも時間を稼ぎたいという気持ち

もあつたが、相手の情報を知りたいという気持ちもあり、男は自身に迫る脅威に対して  
冷静に対処しようと試みた。

そんな思惑があるなか、その男は、質問に淡々と答えた。

「ああ、あれか。所詮はただの雑兵ぞうひょうだったよ。しいて言えば、数が多くて少々手間取ったが、それだけだ。」

あまりに淡々と話すその男に、より一層の危機感を感じ取り、場の緊張が高まる。

その雰囲気、男は唾を飲み込み、先ほど滲ませた汗は、顔から滴り落ちる。

「…っそうですか。それより、あなたは何者です？ 武偵ではなさそうですが、どこの機関

の人間ですか？」

最後に、男は再び質問する。

言葉の一つ一つが趨勢を決するこの状況下において、絶望的な状況に変わりないが、一縷いちるの望みにかけて間隙かんげきを突こうとする男に、その男は再び言葉を発した。

「ああ、お前には名乗っていなかったな。俺は、武装検事の神谷修也。お前を逮捕する者だ。」

そう述べた男、武装検事の神谷修也は、右手に携えた拳銃を向ける。スーツの襟に身に着けている正義の証を輝かせながら。



時は少し遡り：神谷修也は今、オフィスで直属の上司である角宮と話をしていた。

「テロリストの摘発ですか？」

修也がそう述べると、角宮は「そうだ。」と返し、話を続ける。

「先ほど、EOJの残党に関する情報が入ってきた。」

『EOJ』。Emissary of Justiceの略で『正義の使者』とも訳されるテロ集団の名前だ。この集団は、日本に真の正義を取り戻すことを信条としてお

り、反権力思想を掲げる過激な集団である。

彼らは、武力による制圧を手段とし、これまで、民間人を含む多くの死傷者を出してきたが、メンバーの大多数は逮捕、死亡し、現在組織自体は瓦解している。

「しかし、彼らは潜伏しており、居場所すらつかめなかつたはずですよ。その情報の出所は何処ですよ？」

角宮は答えた。

「情報源は不明だ。だが、指定された場所に偵察させたところ、E O Jの残党を確認したそうさ。情報源の存在は気がかりであるが、奴らの尻尾を掴んだ以上、行動するしかあるまい。今回の件で、我々をはじめとした捜査機関は世間の輦蹙ひんしゆくを買っているからな。上もこのままだと、自分の首が吹っ飛ぶと危惧している。早々に決着をつける機会が生まれた以上、なりふり構っていられなくなるだろう。」

上司の話に、修也はこう答えた。

「政治、ですか……。ですが、なぜ私に？私も別件で捜査中なのですが。」

そう。修也は現在、別の捜査をしていた。通常、武装検事は常に多忙なので、暇な日はほとんどないほどハードなスケジュールをこなしているのだ。

そう述べる修也に、上司はこう答えた。

「ああ、お前が捜査中の件だが、進展がないのだろうか？お前の捜査も中長期的に見れば重



要だ。しかし、優先度で言えば、今はこの件が優位に立っている。また、他の武装検事は丁度手が空いていない。よって、この件はお前に任せる。」

「っしかし！私はこの捜査を継続する必要が「神谷！これはお願いではなく命令だ。」……。」

角宮の有無を言わさない発言に、修也は反論しようとしたが、上司の圧に口を閉じる。角宮は、修也に対し話を続ける。

「いいか、この件は早急に終わらせなければならない。これは、我々の今後に禍根を残す案件だ。ゆえに、お前の意見は後回しだ。」

「…了解。」

渋々ではあるが、命令に従った修也は立ち去ろうとしたが、上司は声をかけて制止した。

「待て。まだ伝えておくことがある。」

「何ですか？」

足を止めて振り返る修也に、上司はこう述べる。

「この件だが、上は最悪の場合、E O Jの残党を確実に排除しろと言っている。この意味は分かるな。仮に逃げられるようなら、現場判断で対処しろ。…それから、これは俺個人からの命令だが、残党の中にいるE O Jのリーダー、こいつは可能なら拘束しろ。今

回の事件における重要な情報源だ。」

「了解です。」

「では行け。頼んだぞ。」

こんどこそ、修也は立ち去って行った。そしてこの時をもって、EOJの残党の死亡フラグが成立したのだった。



コツ、コツ、コツ：

そして、修也は情報源にあつた場所に向かつていた。場所は、都内にある廃ビル。人通りの少ないこの場所は、まさに潜伏するには格好の場所ではあるが、修也は以前先ほどの会話内容を思い出していた。

「(しかし、今回の件は不明瞭な点が多すぎる。どう片づけたものか。)」

内心そう語る修也の考えには、確かにそう考えうる根拠があつた。

当初、各捜査機関はEOJの摘発は容易なものと考えていた。EOJが発足した当初の公安の報告によると、EOJのメンバーは学生を中心に構成されており、言動は過激だったものの、これまで武力行使による犯罪行為はなく、悪くても軽犯罪などで取り締

まられてきたからだ。そのため、E O Jが起こした今回の事件は、彼らを監視していた公安にとって望外の出来事だったという。

さらに、上述したようにE O Jのメンバーは学生が中心で、その武力は無為に等しかったのだが、今回の事件で彼らは武装するにとどまらず、軍人レベルの技術を保持していたことが分かった。それにより、所詮学生と舐めていた捜査機関は、見事にしてやられたのだ。

ここで、ある疑問浮上する。それは彼らに資金提供し、戦闘訓練を施したのは誰であるのかだ。彼らが武装していた装備は、とてまただの学生には調達できないほどの金がかかる。当然、これには裏に資金提供をした者がいると考えるのが妥当だ。資金提供者は、国内の過激思想を持つ富裕層か、はたまたどこかの国からの破壊工作活動の一環なのか、依然として判明してない。この存在を見つけない限り、E O Jを摘発するだけでは、根本的な解決にはならないだろう。

すでに逮捕しているメンバーに事情を聞いたところ、その正体を知っているとされるのは、幹部の人間だけで、現在逃亡しているリーダーが最も可能性が高いと述べている。先ほど上司が言っていたのは、まさにこのことだ。今回、潜伏している残党を狩るのは上司にとって建前に過ぎない。今回の事件の真相を知るには、リーダーの情報が必要だ。これには修也も同意見だが、だからこそ今回の情報提供は危惧すべきだと考えて

いる。

この情報に間違いがないのは、偵察からの報告で判明している。しかし、今回の一連の事件がEOMのみの犯行ではないことを考慮すれば、何かしらの意図があるはずだ。

「よつて、これは罠の可能性が高いわけだが……まあこれも最早詮無きことか」

コツ、コツ、コツンツ

思考しているうちに目的地のそばに到着した修也は、物陰に隠れ該当の廃ビルを伺う。地上4階のビル、建物の外に見張りなどはおらず、窓からも人影らしきものは見えない。

修也は、ビルの正面まで近づいた。

「一見人がいる気配はないが……さて。」

とても人がいるようには見えないものの、修也は目を閉じ、ある能力を使用する。

『(超感覚)』

瞬間、修也の感覚器官の能力が急激に上昇し、彼の世界は常人のそれとは一変した。彼は気配察知能力を鋭敏にし、ビル内部の状況を探る。

ジャリ！

「……るな。」

ビル内部のかすかな足あとを探知した修也は、目を開き、ヒップホルスターから拳銃

を取り出し、スライドを引き、弾丸が装填されているか確認する。

チャキツ、チャツ

そして、銃を構えながら、ビル内部へと入っていた。



ビル内部は、外見通り無秩序な空間となっており、コンクリートむき出しでまさに廃ビルとあってよい感じであった。

その中を、修也は気配を完全に消して進んでいく。床には破片などが散乱していて、普通に歩けば音がするのだが、全く音を出さずに、修也は上の階へと移動していった。

そして、二階へと到着すると正面にあるドアの中から、人の気配がし、立ち止まった。

「…(あそこか)」

ドアのそばに移動し、再び能力を使用すると、

「(人数は…2人か。少ないな。残りは何処にいる?)」

部屋の中を感じる気配は、偵察の報告にしては少なすぎる。残りの残党の在り処を考えていると、中から声が聞こえてきた。

「…」「ピピツ」時間だ。俺たちも移動するぞ。」

「やっつとですか。次の拠点はここよりましだといいですよね。」

「文句を言うな。俺たちの大義のために、今は耐え忍べ。」

「へーい。」

「どうやら、少人数に分けて拠点を移動しているらしい。リスクを分散しながら、拠点を移していく。道理で捜査機関が手をこまねているはずだ。奴らは、ここまで周到に逃げていたのだから。」

「（やはり、只の学生と侮ってはいけないな。学生がこの計画を立てたのなら称賛ものだ。しかし、所詮は学生、油断は禁物だ！）」

バン！

「そう思いながら、修也はドアの正面に立ち、ドアをけ破る。」

「ー！」

突然ドアがけ破られたことに驚いた中の二人だが、すぐさま腰にしまった拳銃をとりだそうと動くものの、

「甘いな。」

修也は銃を手にかけたところを狙い、即座に二発発砲した。

ババン！！

「ぐあー！」

撃たれて手が離れるや、修也は相手に接近し、まずは片方を制圧する。

「ふっー！」

「ぐはっー！」

相手との距離は5m弱、それを一瞬で埋めて、下から掌底を繰り出す。顎にクリーンヒットすると、相手は呻き声をあげ、体勢を崩し倒れる。

片方を制圧し終えると、もう片方にすぐさま接近し、一瞬で組み伏せる。

「ぐあっー！」

そして、馬乗りになると、手錠をかけ拘束し、腰の拳銃を奪う。

「全く、これはじゃないぞ。」

そう話しながら、手早く弾倉を抜き、薬室を空にして銃を遠ざける。

また、ほかに武器がないかチェックし、仕込みナイフなどの武器も奪い、同様に捨てた。

ほかにも、

「自決用の毒は仕込んでいないのか。この辺はお粗末だな。」

菌などに毒を仕込んでいないか確認し、ないことを確認すると、先ほど掌底を食らい伸びている方も拘束しに行き、武装解除した。

ひと段落済むと、伸びていない方に近づき、話しかける。

「このまま学生として普通に過ごしていればこんなことにならなかつたものを、人生を棒に振つたな、少年。」

それに反応したのか。その相手は、睨みつけながら修也を見上げて、

「ふざけるな！これは大義のためだ！この腐つた社会を変えようとしてやったことの何が悪い！俺たちがこうして動くのは、この社会を変えようとしなかつたお前らのような存在がいるからだ！」

「悪いが、お前の絵空事を聞くつもりはない。無辜の民を傷つけた以上、お前たちの掲げる大義とやうに正当性はない。諦めろ。」

「……っ！くそ……！」

憤慨しながら叫ぶE.O.Fのメンバー。20代前後、おそらく未成年と思われる少年に向かつて、修也は容赦なく問い詰める。

「さて、お前たちの逃走の手順を聞かせてもらおう。先ほどの話を聞くに、大多数はすでに別の拠点に移つたようだが、その場所は何処にある？話してみろ。」

「ちっ！お前なんかに話すか！政府の犬が！」

案の定拒絶された修也であつたが、すでに行動を起こしている以上、いつ相手に気取られるかわからない。この二人が移動してこないのに気づけば、不審に思つてすぐさま別の拠点に移動するかもしれない。それは、必ず避けなければならぬことだ。



ゆえに、

「そうか、ならば仕方ない。少年、ここで死にたいなら話さずにいればいい。」

「え？」

修也は、極めて冷徹に接することにした。

「お前に撃った弾丸、貫通はしているが出血がひどい。このまま止血しなければ失血死するぞ。俺はそれでもかまわない。多少時間はかかるが、そこにいるもう一人のメンバーを止血して尋問するでしょう。少年、これは慈悲だぞ。ここでお前が俺に協力すれば、命を救うばかりか、ほかのメンバーより幾分か減刑するよう働きかけよう。そのまま死ぬか、生きて次の人生を少しでも楽に始めるか、どちらか選べ。」

未成年に対する態度とはいえないぐらいのレベルで話す修也に恐れを抱き始めたのか、少年は青ざめながら、わなわなと口を震わせ、言葉を発しようとする。

「おっおれは……」

その様子に好機と見るや、修也はさらに畳みかける。

「考えるのは結構だが、こちらに時間的猶予はない。早く決断しろ。」

「うつつう……」

ついには泣き始めた少年に、修也はとどめを刺す。

「そうか、話さないか。残念だ。なら、後悔しながらここで野垂れ死ぬといい。」

修也が立ち去ろうとすると、

「わかった！はなすよ！だから助けて！」

それを聞いた修也は、後姿を見せながらほくそ笑んで、少年に振り向く。

「では、話してもらおう。」



少年の話聞いた修也は、二人に止血を施すと、廃ビルに救急車を手配してすぐさま移動した。

どうやら、E O Fの残党は主に下水道を移動して拠点を移しており、目的地には、別に斥候が偵察し、周囲の状況を判断しており、慎重に移動をしているとのことだ。この手順で、少しずつ人数を移しながら、捜査機関の追跡から逃れていたらしい。

コッ！コッ！コッ！コッ！…

現在、修也はその下水道を走りながら、目的地に向かっていた。

また、会敵しないよう、超感覚を使いながら、慎重かつ迅速に行動していた。

コッ！

いったん止まって、現在地を確認する修也。ここまで数十分走ってきたようだが、疲

れている気配を全く見せていない。

「(ここまで来たが、あの少年から聞いた情報通りならこの辺りに…あったな。)」

修也は、壁に刻まれた印をなぞる。少年によると、この印の50m先に出口があると  
言っていた。

出口が先にあるとわかり、修也は再び歩を進める。

コツ！コツ！コツ！コツ！コツン！

ようやくそれらしきものが目に入った。梯子だ。

「これか…」

梯子のそばに近づくと、修也は拳銃をホルスターに戻す。ここから先は、敵がいるこ  
とが確定している。よって銃声を聞かれるわけにはいかないからだ。

修也は梯子を上っていき、マンホールのそばまで来ると、

コンッコンッ

二回たたいた。これが地上にいる斥候に向けての合図らしい。この音を聞いた斥候  
が周囲の安全を確認し、安全を判断するとたたき返すとのことだ。

修也がたたいてから少しすると、

コンコン

音が返ってきた。ここから先は、時間が勝負となる。まずは、上にいる斥候を制圧し

なければならぬ。

修也は、合図を確認し、マンホールの蓋を動かしながら、ずらしていく。蓋が空くと、修也はすぐさま梯子を上り、地上に到達する。

出てきた修也の前には、斥候と思わしき青年が一名、こちらに後ろを向けている。どうやら、こちらを見られないように体全体で隠しているようだ。

これは好機と、修也は青年の背後を取る。青年は、こちらに振り向きながら声をかけるも、

「さあ、お前たちが最後だ。早く蓋をもどして!?!おまえは「悪いな。」ぐっ!…!」

時すでに遅く、手早く絞め落とされ気絶する。そして、これまでのように拘束し、武装解除させた。

最初の関門もあっさり片づき、修也はいよいよ、本丸へと移動していく。

先ほどみたような廃ビルが目の前にあり、今度は人の気配を多く感じた。

「では、制圧するでしょう。」

修也は目的地向と足を進める。



それからは、まさに圧倒的だった。

ビル内部へと侵入した修也は、見張りを悉く無力化し、先のビルの二人のバックにあつた閃光手榴弾をメンバーが集まっている部屋に投げ入れ、残党勢力がひるんでいる間に一瞬で無力化した。

カンツカンツ

『うん?…なっ!おい!敵襲d』

バーン!

『がーっ!目がー!』

『敵はどこだ!わからない!』

『くそ!迎撃しろ!撃てー!』

パン!パン!バババババ!バン!バン!

『おい!闇雲に撃つな!これだと味方n「まずは一人。」ぐほ!』バタン!

『おっおい!敵は何処だ!「二人。」ぐほ!』ドン!

そして、閃光手榴弾の効き目が消えるころには、

「「…うう……。」」

EOFの残党たちは死屍累々だった。閃光手榴弾の効力が消えるわずかな時間の間に、計18名の武装したEOFメンバーを全員無力化したのだ。

しかし、どうやらこれで終いではなかったようだ。  
ガタンツ！タツタツタ：

「…逃がしたか。」

すぐに追いかけていたいところだが、彼らをこのままにするわけにはいかず、応援を要請したのち、拘束と武装解除を直ちに済ませ、その後あたりを見渡すと、

「ここから逃げたのか。」

どうやら、修也が入ってきたのは別のドアがあつたようだ。

「追わなくては…。」

修也は、銃を構え残党の追跡を始めた。

そして、時は冒頭へと戻る。



「しかし、仲間を見捨てて先んじて逃げるとは。リーダーとして失格ではないか？」

銃口を向けながら、修也は話す。

リーダーは苦笑交じりに答える。

「戦略的撤退ですよ。リーダーである僕が捕まれば、E O Fは本当に終わる。我々の大

義を叶えるためにも、この選択は正しい判断です。」

部下を見捨てたのはさも当然であるかのように話すリーダーに、修也は言い返す。

「だが、その大義もここで終わりだ。このままだとお前はここで拘束され、二度と目の目を浴びることはない。刑務所で一生を過ごすことになるだろう。」

修也の言葉に反応したのか、リーダーも聞き返す。

「このままだと?・・・ああ、道理で武装検事であるあなたが僕を殺さないはずだ。なるほど、今回の一件を手助けした黒幕をあなたは知りたがっているのですね。」

「話が早いな。今回の一件で、お前たちE.O.Fは統率された武装集団として、訓練が施されていた。それを実現した者の正体、リーダーであるお前は知っているのか?」

「ええ、勿論・・・と言いたいところですが、残念ながらその正体はわかりません。」

「: : : そうか、ならば「だが、その目的は知っています。」: : : ほお、ぜひとも教えてもらいたいものだな。」

膠着状態が続く中、話は続いていく。

そんななか、リーダーは交渉をしかけ始める。

「ですが、その前に。今回の一件、司法取引で僕に減刑の処置を取ることを確認していただきたい。その確約が得られなければ、何も話しません。」

条件を出してくるリーダーに、修也は答える。

「ああ、いいだろう。黒幕について有益な情報が得られるのなら、安い買い物だ。」

「では取引成立ですね。安心してください。あなたたちにとつてこの情報は損ではないはずですよ。……あと、銃を下ろしてもらえませんか？これでは満足に話せない。」

そして、拳銃を下ろすよう催促するリーダーに、

「……ああ、いいだろう。」

修也は従い、銃口を下ろした瞬間、

「！ッ」

ダァン！

突然、拳銃を取り出したリーダーが修也に発砲した。

しかし、

キーン！！！！

「なっ！！」

リーダーが驚愕する先にあつたのは、

「隙を突こうとしたのはいい心がけだが、相手が悪かつたな。」

左手でナイフを先に出している修也の姿だつた。

その二人の物理的な距離は短いにもかかわらず、しかしそこには圧倒的な差があつた。



「…化け物ですね。これが武装検事ですか。」

「ああ、これで満足か？」

「ええ、満足です…（なるほど…これが…）」

「?なんだ。」

「いえ、なんでもありません。では、行きましようか。」

何か思うことがあったのか、しばし修也を見つめていたが、拳銃を捨て、今度こそ降伏の意思を示すように両手を上げたリーダー。

それに倣い、警戒はしながらも武器をしまい拘束する修也。

これで、ようやく事件は一旦終息する……

はずだった。



リーダーを連れて行きながら、路地裏から大通りへと移動する修也。

電話で迎いの車を来させるように話しているなか、リーダーは修也に話しかけてきた。

「ああ、すぐに車を寄こしてくれ。頼む。」ピツ」：「いいですか。」：「何だ。」

リーダーは儂げな顔を浮かべながら、修也に語る。

「僕は、最初は純粋な思いでした。EOMを立ち上げたのは、我々若者も行動すれば、何かしらの変化を社会に対して促せるという思いがあったからでした。しかし、それは悉く水泡に帰しました。僕らは現実を直視して思い知らされたんです。僕たちはどうしようもなく、無力なのだ。」

「…。」

「そんな時でした。ある人物が、接触が僕たちにこんなことも持ち掛けたのです。「私

が、君たちの望みを叶えるのに必要な力をあげよう。」と。先ほど話したように、その正体はわかりません。しかし、その人は僕らにあらゆる支援を施し、結果、僕らは力を手に入れることができたのです。」

「利用されているとは、考えはしなかったのか。」

修也の問いに、リーダーは答える。

「勿論考えました。ですが、結果的に僕らはその甘美な果実に飛びつき、もう後戻りできない段階まで進みました。今にして思えば、その人物が接触してきた時点で僕たちの運命は決定付けられたのでしようが、どちらにせよ、僕らの考えは変わらなかつたでしょう。」

「…そうか。接触してきたとき、そいつは顔をさらしたのか？それとも、直接会っていないのか？」

「後者が正解です。電話以外の接触手段はなく、その声も変声機を使用して、性別すらわからないまま、最後までその人物とは一度も会ったことはありません。」

「どうやら、事件の裏にいる協力者は、その正体を知られないよう徹底していたようだ。その後、訓練施設や、情報提供の方法など、いくつか質問したが確信に迫れるものはなかった。訓練施設については場所を聞いたものの、この分だとその施設が残っているのか疑わしいものだ。」

流れに乗ってきたからか、修也は思わず核心について問いただそうとする。

「そうか、ではそいつの目的は…いや、これは後々の話だったな。忘れてくれ。」

「…まあ、本来なら司法取引がなされるまで話すべきではないのですが…いいでしょう。あなたになら、話しても問題ないでしょう。実は、一度その人物に聞いたことがあるんです。一体どのような目的で、僕らに手を貸しているのか。」

リーダーは話し始める。ここまで話している間にいつのまにか大通りが目の前に見えてきていた。それでも、彼は話し続ける。

「変声機越しでしたが、今まで話してきて、これは本心だと僕でもわかったんです。その時、その人物が答えたことは…」

そして、二人が大通りへ出てきて立ち止まった時、

リーダーに赤いレーザーが照射され、修也がそれを見た瞬間、

「!?伏せろお!」

「え?」

ダアアン!

銃声が鳴り響いた。

「かはっ!」

「くそっ!」

リーダーは倒れこみ、修也はすぐさま駆け寄り、近くの物陰に引きずりながら避難する。

狙撃されたリーダーはかなりの重傷で危険な状態だ。

「おい!しっかりしろ!死ぬな!」

「はあ、はあ、はあ……」

修也は、止血しようと出血個所を抑えるが、血が止まる様子はない。

また、リーダーには意識はあるものの、しゃべれそうにない。

「くっ!」「ピピッピ」……救急車を一台寄こしてくれ!大至急だ!撃たれて重傷を負っている!」

「はあ、はあ、……。」スツ

その時、修也の様子を見ていたリーダーは、自身の血でぬれた手を彼に伸ばし、スツの裾を掴んだ。

突然の行動に、修也は携帯電話から耳を離し、声をかける。

「どうした。今すぐ救急車を呼ぶからじっとしろ。」

「……。」ギユッ！

答える余力がないのか、言葉を発さないが、ただ掴んだ裾を強く握り、修也に目を向けて何かを伝えようとしていた。

しかし、

「……。」ズルッ

彼の手は力を失い、そのまま地面に落下した。

同時に、修也は彼の脈を図るが、

「……。」

深夜、人通りのない寂しい道端で、E O Jのリーダーは、若くしてその生涯を終え、それを見届けた修也は、サイレンの音が近づいてくるのを只聞くのみだった。

そのスツの裾に、しわくちやに掴まれた血の跡を残しながら。



夜が明け、場所は都内中心部にある高級ホテルのラウンジに移る。

その窓際の席で、E O Jの事件に関する一面記事が載った新聞を読んでいる人物がいた。

『E O J 残党摘発、主犯格の●▲は死亡。武検局の大手柄。』

その人物は、一通り読んだのか、いったん新聞をテーブルに置き、あつた紅茶を飲みながら、窓の外を見つめる。

それから少しして、携帯を取り出し、どこかに電話を掛けた。三度コール音が鳴り、電話がつながると、その人物は話し始めた。

「やあ、新聞は読んだよ。ご苦労様。まあ彼が死んだのは武検局の手柄ということになってはいるけど、全く問題ない。：ああ、結果は上々だよ。死んだ彼を含め、E O Jのメンバーは最後までよい働きをしてくれた。支援した甲斐があつたものだよ。では、あとは手筈通りに片づけておいてくれ。よろしく頼んだよ。「ピッ」：。」

その人物は、テーブルにおいてある新聞に目を向ける。

「(しかし、急ごしらえとはいえ、私が仕込んだ駒がいとも容易く落とされるとは。私が考えていた以上に、君は素晴らしい演技を披露してくれた。なるほど我々に喰らいつこ

うとするだけはある。…ふふふ、ますます興味深い。さあ、君は私を楽しませてくれるのだろうか。武装検事の、神谷修也君?」

そして、その人物は、愉悅に浸りながら優雅に紅茶を味わう。

まるで、新しい玩具が手に入った時のような、無邪気な笑みを浮かべながら。

E O J が一連の事件を起こす前日の夜、リーダーと支援者はこのような会話をしていた。

『…そういえば、一つ聞きたいことがあるんですが…』

『何かな?』

『あなたが僕らに手を貸す目的が知りたい。』

『それは勿論、君たちの理念に共感して『嘘ではなく本心で教えていただきたい。』…ふむ、まあ構わないよ。私の目的、それは快樂だ。だが、これはただの快樂ではない。それは、私の生み出す至高の劇でしか得られない唯一無二の快樂なのであり、この快樂でしか、私は十全に心を満たされないのだよ。しかし、至高の劇場には、それに相応しい至高の演者が必要になる。今回、私が君たちに手を貸すのは、その至高の演者になりうる逸材を見極めるためでしかない。これがすべてだ。満足したかな?』

『……つまり、僕らはあなたの生み出す劇の端役ですらないというわけだ。…では、その

至高の演者になりうる逸材とは一体誰なのですか？」

『誰かは、君も会えば自ずとわかる。だが、名前だけは教えてあげよう。その人物の名は……』



そして、この事件が一旦終息してから丁度一週間後、修也は謎の男と接触し、事態は急転する。それが修也に何をもたらすのか、今はまだ誰も知らない。